

BASEBALL COLUMN

ベースボールコラム

特別連載

vol.32

公益財団法人
野球殿堂博物館

沢村栄治投手 1937年春季MVP表彰状

2017年2月1日、プロ野球草創期の大投手、沢村栄治氏が誕生して100周年を迎えました。これを記念して沢村投手の生誕地、三重県伊勢市の観光文化会館では記念展が開催(3/20～26)され、当博物館からは沢村投手のサインが書かれた1937年の東京巨人サインボール等を出品しました。

今回ご紹介するのは、沢村栄治投手と1937年春のシーズンに同投手が受賞した、最高殊勲選手賞の表彰状です。

沢村投手は、京都商で1934年の第20回全国中等学校優勝野球大会(現在の夏の甲子園大会)に出場、1回戦で鳥取一中に1－3で敗れました。その後同校を中退し、同年秋の日米野球に出場する全日本チームに加わりました。11月20日の静岡草薙球場での試合では、大リーグ選抜のベブ・ルースやルー・ゲーリッグらから4連続奪三振の力投を見せ(0－1で惜敗)、日本を代表する投手となります。日米野球終了後、全日本チームを

中心に大日本東京野球倶楽部(現在の読売ジャイアンツ)が誕生、1936年には7球団により日本職業野球連盟が創立され、公式戦がスタートしました。沢村投手は巨人のエースとして活躍、1936年のタイガースとの年度優勝決定戦では3連投で巨人を初優勝に導きました。

1937年は春、秋の2シーズン制で行われました。春はチームの56試合のうち30試合に登板、先発した24試合すべてに完投し、うち完封7、24勝4敗1分け、196奪三振、防御率0.81で勝利、奪三振、防御率のリーグ最高を記録しました。このシーズンから始まった最高殊勲選手賞の受賞第1号となり、授与されたのがこの表彰状です。当博物館開館時にご遺族より寄贈されました。

それからわずか半年後の1938年1月には召集され、1940年6月に2年半のブランクを経て復帰、7月には自身3度目のノーヒットノーランを達成しました。翌1941年秋に再度召集、1943年1月に戦地から帰国し、



主将としてチームに復帰しました。しかし「昔日の快速球投手の面影はなく」(東京読売巨人軍五十年史)、この年が最後のシーズンとなりました。

通算5年間のプロ野球選手生活で105試合、765回1/3を投げ、63勝22敗、554奪三振、防御率1.74の成績を残しました。

1944年秋に3度目の召集。12月2日、屋久島西方の東シナ海で、フィリピンに向かう沢村氏らを乗せた輸送船が米潜水艦の攻撃により撃沈され、27歳の若さで戦死しました。1934年の日米野球最終戦(12月1日、宇都宮)翌日から、ちょうど10年後のことでした。

学芸員 関口 貴広